

2017年2月22日

2017年2月 Nr. 431

さて、今回は、学者の研究に関する不正行為（Forschungsbetrug）が話題になっています。

学者たちは知識を創造するものですが、これは独立した研究において完全なる透明さで行われなければなりません。そして、学者たちが互いに批判し合うことが必要です。しかしながらますます多くの研究結果が発表されることにより相互批判が妨げられている状況にあります。発表された研究成果の数は容易に確認することができますが、研究成果の内容を確認することはなかなか難しいからです。

現在医学および自然科学の分野だけで世界中では何と6万種類もの学術雑誌が存在し、ここでは1日に2万件もの学術論文が発表されているとのこと。誤りのある論文は時折、取り消された後で、無効とされますが、論文の発表から取り消しまでの間には既にその論文は他の学者の研究成果に取り込まれてしまっています。自然科学の研究成果は再現できるものでなければなりません、難しい実験ではしばしば誰も一連の実験工程すべてを進んで再度行うことを進んで引き受けたりしないようです。他の研究者の成果については誰もがまずはすべてが正しいと想定し、再度同じ成果にたどり着く目的のためだけには、これを引き受けようとは大抵誰も思わないとのこと。他の研究者の研究成果を確認することは、学術的成果とは見なされないという背景があるためようです。

さて、学者による研究不正行為についてですが、この問題に詳しいオーストリアの専門家は殊に3つの類型を指摘しています。一番目は、誤っていると気づいていながら、つまり故意で、または実に不注意に、つまり過失によりある報告がなされるというものです。例えば、実際はその労を全くとらなかったにもかかわらず、あることを究明したと主張することなどです。2番目は、剽窃すること、すなわち他の人が発表したものをそのことに言及せずに盗用してしまうことです。第3は、ある研究者が自分の主張に合致している箇所だけを使用し、他の情報や実験結果をあつさり省略するというものです。このことは特に新しい薬品の効果を記載する場合にしばしば起きているとのこと。

社会科学においては質問用紙を使って多く作業が行われます。そこでは不正行為は特に立証することが難しいといえます。質問用紙は容易に改ざんできるからです。また質問用紙は、長期間保管する必要がありません。再度アンケートを行うのは高くつくといえます。

不正行為が行われていると感じた者は、それを告発すべきです。しかしながら、そのようなことは専門家しか気が付きませんし、彼ら専門家は互いに知り合いです。ですが、匿名の告発については道徳的に非難すべきだとは思われていませんが、自分の名前を明示しない場合、非難の根拠がたぶん乏しいからだと考える人々もいます。一方では、匿名の非難はしばしばかなり重要なヒントになるといいます。

大抵の学者は教授ではありません。多くの学者は時限契約、すなわち、1年または2,3年などの限られた期間の契約しか締結していません。この期限内にプロジェクトを成し遂げなければなりません。このことは、実験を繰り返す時間がしばしば足りないことを意味し、そこではアンケートの結果にせよ一連の実験結果にせよ都合良く補足して完全なものにしてしまう誘惑が大きくなるといえます……。

さて、学者の研究に関する不正行為に関しては、私はここ数年に起きた二つの「事件」が思い浮かびました。一つ目は2011年のドイツのかつての国防大臣だった Karl-Theodor zu Guttenberg 氏の博士論文盗用とその結果としての大臣辞任と議員辞職です。この件は、ゲーテの授業でも扱いましたのでよく覚えています。論文盗用疑惑が指摘された際、彼は否定していましたが、バイロイト大学から盗用を認定され、博士号を剥奪されるに至り、責任を取って大臣を辞任すると同時に連邦議会議員も辞職しました。かつて好感度が高かった議員で将来の首相候補とも目されていた人物の政界からの退場は大きな衝撃を与えました。二つ目は、2014年の日本の STAP 細胞騒動です。これが真実であれば画期的な発見でしたので、発表時はもとより論文撤回時も日本のみならず世界的に大きなニュースとなりました。こちらの事件では有能な科学者の自殺者まで生む悲劇となってしまいました。

また、放送で触れている1997年に発覚した Friedhelm Herrmann 氏の事件は当時、ドイツの学会に大きな衝撃を与えたようですが、私自身がドイツに対して関心が薄れた時期でもありましたのでこの事件のことを私は知りませんでした（日本のメディアでも報道されたとは思いますが）。

ところで、今回も語彙に関し私にとっては新しい発見がありました。それは、課題でも触れておりますが、Magazin に意外な意味があることを知ったことです。これまで Magazin は私にとっては「雑誌」がすべてであり、Zeitschrift とほぼ同義だとしか認識していませんでしたが、今回の課題を受けて改めて手元の独和辞書で調べて見たところ、「雑誌」と「ニュースショー」の他に「倉庫、貯蔵庫、(図書館の) 書庫、(美術館・博物館の) 収蔵庫」などの意味があることを知りました。また、手元の独々辞典ではこれらを裏付けるように、語義としては reich bebilderte, unterhaltende oder populär

unterrichtende Zeitschrift は当然として、他に Lager や Aufbewahrungsraum für die Bücher einer Bibliothek oder für die nicht aufgestellten Sammelstücke eines Museums などの記載がありました。語源を調べてみますと、アラビア語の makhāzin (「倉庫」) と記載されていました(ところで英和辞典にも magazine の語源について同様の記載があり、16 世紀に「倉庫」という意味で使用されたものが 17 世紀になって「雑誌」という意味が加わったようですが、ドイツ語においても同じような流れを辿ったものと推定されます)。ということで今回は、Magazin という語に「倉庫」などの意外な意味があること、そして「いろいろなものを所蔵している保管庫」から派生し、「雑誌」や「ニュースショー」という意味になったらしいことを知ることができ大変興味をそそられた次第です。

K. K

2017年3月19日

## 2017年3月 Nr. 432

さて、今回は、貧困 (Armut) が話題になっています。

今回の特集番組において1年前、レポーターのロート氏 (Herr Roth) が自問したのは、ドイツのような富める国において貧困とはどのように理解されるべきなのか、そして車を保有している者もまた貧しいと言い得るのかということでした。今日のドイツの貧しい人々の状況は、稼ぐお金が少なくて路上で寝ざるを得ないインドのレンガ積み工または十分な食べ物がなかった19世紀のベルリンの貧しい身なりをした日雇い労働者とは当然全く異なるといいます。

貧困という場合、今日のドイツではデパートまたはショッピングセンターの前で跪いて1ユーロを物乞いする乞食、食べ物を買うお金が乏しく、無償の食料を配給窓口の前で大勢して待っているか、レストランで残り物がないかを尋ねる人々、体育館に収容されている難民たち、それに2, 3のビニール袋に自分の全財産を詰め込んでいつも携帯しているホームレスたちを思い浮かべます。

多くの貧しい人達は、孤独で不満を抱いていますし、また文化的小よび情緒的な貧しさにも見舞われることがあります。一方で、文化面の興味を失わず、社会的に活動をしている人は、長期間失業していても、孤独になるには及ばないといいます。というのは、国家がその失業者が十分食べられるようにしてくれるだけでなく、住居も購入できるよう、面倒を見てくれるからです。失業した人は、1年間、失業保険からお金、すなわち最後の手取り収入の67%の給付を受けられということです。これは第一種失業手当 (Arbeitslosengeld I) と呼ばれます。1年経っても引き続き職探しをしている人は、国からお金をもらうのですが、これはしかしながら、自分の貯金で生活できない場合に限られています。この時受給できる第二種失業手当 (Arbeitslosengeld II) は、「ハルツ4」 (Hartz IV) とも言われます。「ハルツ4」とは、フォルクスワーゲンの元人事担当役員ペーター・ハルツ氏 (Herr Hartz) が委員長を務めていた委員会が2002年に提案した4番目の改革案だったことに由来します。これは困窮した失業者のために失業手当と社会扶助とを統合するものでした。

さて、社会科学においては一家計での全所得がドイツの家計の中央値の所得の50%を下回る場合、相対的貧困 (Relative Armut) と言います。しかしここで言う中央値の所得とは平均所得ではなく、社会の中央の所得金額のことです。そしてこの所得中央値の50%にあるのが貧困線であり、さらに所得中央値の40%を下回る人は「極めて貧しい」、つまり「極

貧」とされています。

第二種失業手当は、失業している場合だけでなく、仕事で収入が少なすぎる場合の所得補充として給付を受けるものでもあります。極貧とされるのは、ホームレスたちや不法にドイツに住んでいる移民のような、相対的に小さな集団です。しかしながらストレスや存在不安は貧困に陥る危険性のある人たちにもあるといわれます。彼らは、所得中央値の 60%しか支出できない市民であり、その所得では直に所得中央値の 50%という貧困線を下回ってしまう可能性があります。しかしながら、その危惧される社会的な陥落に対しての抗議については全く聞かれることはありません。

貧しい人たちは、しばしば軽蔑され、疎外感を感じます。少ない収入は、しばしば不十分な教育に起因しますし、しばしば不健康な状態と結びついています。貧しい人々は、そうでない人に比べドイツでも常に寿命がより短い傾向にあります。大抵貧しい人々は、小さな、設備の整っていない住居に住んでいます。その住居のある市区にはまた、多くの貧しい人々が住んでおり、その市区では学校やレクリエーション余暇施設の設備が他の市区より整っていないといえます。

ドイツの国民総生産は過去数十年の間に大きく伸びました。貧困を抑え、克服するための前提条件は現在存在しています。ロート氏 (Herr Roth) は、最も重要なのは完全雇用、つまり 2%までの失業率への復帰のための施策であるといえます。一つの選択肢としては富裕層に対するより高い課税を通じて再分配することではないかといえます……。

さて、一般的には、「貧しい」または「長期間の失業」→「不幸」というイメージがありますが、放送で紹介された「長期間失業」しながらも「豊かである」事例が私の印象に残りました。それはクレマーさん (Herr Kremer) という放送当時 47 歳のマンハイム在住の男性です。彼は長期間レストラン業界にいましたが、長期間失業中で現在は第二種失業手当を受けています。その傍らで職種転換のために教育者としての職業教育を受けています。また併せて教会関連のボランティア活動もしています。端から見れば貧しい部類に入るかも知れませんが、彼自身は貧しいどころか、実は豊かであるという認識でいます。それは彼がレポーターに対しそのボランティア活動や家族について生き生きと、そして満足そうに語る様子からも窺うことができます。

ここ十数年来世界的に貧困の問題がクローズアップされています。グローバル化に伴う貧富の格差の拡大、子供の貧困 (Kinderarmut)、「働く貧困層」といういわゆる「ワーキングプア」(Erwerbsarmut)、高齢者の貧困 (Altersarmut) などの言葉が私にも思い浮かびます。そしてこれらの問題に関連し最近では最低生活保障 (英語ではベーシックインカ

ムまたは略して BI と表現することは知っていましたが、調べたところではドイツ語では *Bedingungsloses Grundeinkommen* という語句がこれに相当するようです) という考え方に注目が集まってきています。最低生活保障についてはたまたま数日前の日本経済新聞にも掲載されていました。同紙によりますと、BI とは政府がすべての人に生活に必要な最低限のお金を配る制度であり、仕事の有無や裕福かどうかに関係なく、例えば 10 万円を皆に一律に毎月支給する仕組みだそうです。フィンランドが今年 1 月から 2,000 人の失業者にも月額 560 ユーロを支給する社会実験をスタートし、2 年間かけて検証するそうです。検証結果が注目されるのですが、私個人の印象としては、膨大な財源が必要になり、その財源の手当のために大きな税負担が必要になるだろうと思われまので、広く実現することは難しいだろうと思います。

ところで、今回話題になっている相対的貧困ですが、最新のデータである OECD の 2014 年の相対的貧困率を Wikipedia より国別にチェックしましたところ、イスラエルの 18.6% (2014 年) が最も高く、アメリカ合衆国の 17.5% (2014 年) がこれに続き、日本は 16.1% (2012 年) で 36 カ国中 7 番目、ドイツは 9.1% (2013 年) で 23 番目、そして北欧はスウェーデン (8.8%) ~ デンマーク (5.4%) と非常に低いことが判明しました。アメリカ合衆国が高く、北欧諸国が低いことは何となく予想していましたが、日本の相対的貧困率がこれほど高いとは想像もしていませんでしたので衝撃を受けました。しかも、日本の 16.1% は、厚生労働省によりますとデータが存在する 1985 年以降、最も高い数値とのもので、今後ますます上昇していくのではないかという懸念がありそうです。日本では失業率は既に 3% 程度が達成されていますので、残る施策としては富裕層への課税強化と貧困層への再配分が必要かもしれません。また、貧しい家庭の子供たちに「子ども食堂」などを通じて食事を与える活動が日本でも盛んになってきているようですが、貧困対策そのものではないにしても貧困に伴う欠食を補う意味でも意義があるように思います。

また、放送で触れられている「フードバンク」(「包装の傷みなどで、品質に問題がないにもかかわらず市場で流通出来なくなった食品を、企業から寄附を受け生活困窮者などに配給する活動およびその活動を行う団体」Wikipedia より) のことをドイツ語では *Tafeln* ということを知りました。手元の独和辞書を調べてみますと *Tafel* には今まで知っていた「板」、「黒板」、「表」の他に「食卓」や「食事」という語義も掲載されていることを確認し、フードバンクを表すドイツ語としての *Tafeln* に納得したところです。併せてこの語義をベースにした *vor/während/nach der Tafel*、*jemanden zur Tafel bitten* などの表現があることも知りました。

K. K.

2017年4月16日

## 2017年4月 Nr. 433

さて、今回は、先月の貧困（Armut）と関連しておりますが、格差の拡大（Zunehmende Ungleichheit）やその結果もたらされた中間層（中間階級）の縮小が話題になっています。

ドイツでは60年代にはすべての労働者の90%がいわゆる普通の労働条件で働いていました。彼らは、被雇用者に対する解雇からの保護や疾病（健康）保険、年金保険、失業保険の付与された期限を定めない雇用を有していました。しかしながら、市場や経済のグローバル化の影響を受け90年代および21世紀の最初の10年間に低賃金の仕事が増え、それより好条件の仕事が見つからなければ甘んじてそのような低賃金の仕事をせざるを得ませんでした。そして期限付の仕事またはパートタイムの仕事さえもが専門職、自営業（フリー）の人、学者（研究者）、ジャーナリストそして教師にも及んできているといます。

十分な職業教育を受けた求職者にとっても好条件の職を得る機会はこちら数十年の間ますます悪化しています。収入や資産の不平等はますます拡大しています。失業率は下がっていますが、これは多くの人がパートタイムの仕事または期間が限定された労働契約で働いているからという側面もあるようです。その結果彼らはいつもまた失業するのではないかという懸念を抱いています。以前であれば十分な職業教育を受け、努力すれば、家庭、家、車それに毎年の休暇が保証された生活を営むことができたものです。例えその持ち家が大抵の人々にとっては邸宅ではなく、テラスハウスに過ぎないとしても・・・。

現代は経済成長や福祉の拡大の恩恵を受けている人々がますます少なくなっています。社会的な不平等が増してきています。貧しい人々は貧しいままですし、富める人々はますます富を蓄積しているというわけです。70年代まではまだ多くの人々は、教育、能力それに働くことにより実際に社会的な果実を手にすることができました。具体的には、人は休暇旅行にも行けましたし、誰もが一部屋持てるようなより良く、より大きな住宅を購入することができました。これは多くの人に対し安心感を与えました。翻って現在は、社会は全体としては確かにますます裕福になっていますが、その恩恵に与えるのは富裕層に限られるといます。

2011年末にはすべての従業員の内のほぼ三分之一が要請に基づいて働くか、期限付の給料

の低い契約をしているか、フリーとしてずっと低すぎる報酬で働かなければなりません。そしてこの状況は既に記載した通り、学者（研究者）にも及んでいます。その例としてフンボルト大学でゼミを行っているある女性大学講師が紹介されています。彼女は自分がいつか期限の定めのない雇用を得られかどうか、大学のあるベルリンに居られるかどうかまたは引越しをしなければならないかどうか、そして彼女の期限付契約の満了後は再び失業してしまうのではないかと分らないといえます。この女性講師は、講演で成果を上げ、学術論文を發表し、社会学の専門分野における学術的な従業員として授業をし、働いていてもいます。しかしながら、この講師の両親は彼女のことをとても心配しています。両親はなぜ彼女の職業上の将来がずっとこれほど不安定のままなのか理解することができません。

大学に留まろうとする者は、何年もの間短期の期限の定めのある契約に満足しなければならないとのことです。これらの契約のため長期に亘る将来および家族計画が困難になっています。大学教授の職をようやく手に入れた者は、平均するともう 42 歳になっているとのことです。そして 12 年経ってもこれが叶わなかった者は、その時は大学を辞めなければならないといえます。しかしながら、この 12 年の間、しばしば 3 年間の雇用契約を更新して締結できず、半年間の雇用契約しか結べない場合があります。そのため学者（研究者）たちは落ち着いて研究に打ち込むことがほとんどできなくなっているとのことです……。

また、今回の放送・課題では経済的な理由で医者にかかれなくなった中間層（中間階級）の人々のための診療所 „Praxis ohne Grenzen“ についても触れられています。お金を取らないで患者のために週 1 回は自分の診療所を開いている医師（Dr. Uwe Denker）のところには、ホームレス、パスポートを捨ててしまった不法移民、戦争難民それに難民認定申請者などはほとんど訪れません。その診療所にやって来るのは、稼ぎが少なくてもその中から医療保険を支払えない中間層の市民たちということです。

その中には例えば保険会社でフリーとして働いている保険外交員がいますが、十分な収入がないため、自分自身は保険に加入していないといえます。2015 年にこの医師のもとを訪れた患者の中には、出版社勤務のフリーの従業員、飲食店の主人、美容師、不動産仲介業者、大工、れんが積み工の親方、鉄骨建築エンジニアなどあらゆる職業の人々がいました。

さて、今回放送で紹介された Dr. Uwe Denker の活動についてホームページで調べたところ、2010 年にシュレーズヴィヒ・ホルシュタイン州の小さな街 Bad Segeberg での診療所の開設によりスタートしたこの活動拠点は、放送当時の 2016 年 6 月時点で同州で 5 箇所、ドイツ全体では 20 箇所だったということですが、現在では同州だけでも 9 箇所に拡大しているようです。ドイツ全体でのデータは入手できませんでしたが同様に増えているも



のと思われます。Dr. Uwe Denker は第二次世界大戦中に生まれたとのことですので既に70歳代でしょうし、本来なら年金生活をしている年代ですが、自分の本来の診療所は娘に譲りつつ、多くの賛同者・協力者を得てボランティアとして„Praxis ohne Grenzen“の活動に熱心に取り組んでいる様子が窺われます。診察の結果手術が必要になった患者は市立病院に搬送されますが、処置費用は診療所の負担とのこと。診療所の経費は主に寄附でまかなっているようですが、行政からの資金援助があるのかどうかまでは確認できませんでした。

今回特に印象に残ったのは、Dr. Uwe Denker の診療所に来た患者の中である保険外交員です。顧客に保険を販売しながらも自らは収入が少なく保険に加入できないというのは驚きましたし、何と言う皮肉でしょうか。確かに雇用者がこれを知ったら驚き、落胆もし、怒りを感じるだろうと想像できます。

また、„Praxis ohne Grenzen“という名称は„Ärzte ohne Grenzen“（「国境なき医師団」）を連想させました。

ところで、中間層（中間階級）の縮小については日本でも大きな問題になっておりますが、中々解決の糸口が見つかっておらず、苦慮しているというのが実態だと感じます。おそらくこの問題を一気に解決できるような「特効薬」などは存在せず、有効と思われる様々な方法を組み合わせながら、少しでも状況の改善を図る以外に道はないのではないかと思います。

K. K.

2017年5月20日

2017年5月 Nr. 434

さて、今回は、さまざまな場面でのセルフサービス (Selbstbedienung) が話題になっています。

#### 【レストランやスーパーマーケット】

セルフサービスには長所もあります。お客はセルフサービスのレストランでは食べたいものを異なる皿に食べたい量だけ載せ、個々にレジでチェックを受け、本当に食べたいものだけを支払います。この方式は速いですし、格安であり、お客は後でテーブルを自分で片付け、食器を運び去る手間をその対価として喜んで引き受けます。

更なる長所は、皿に載せる料理の内容が分かることです。セルフサービスでない場合は、お客がメニューをもらって読むだけではそこに記載されている料理がどのようなものか分からない場合がしばしばあるからです。

果物や野菜の購入においては似たようなことが行われているセルフサービスの店があります。そこのお客は自分が欲しいものを選び出し、その中から自分が買いたいものだけを袋に入れます。それはその後レジでチェックされます。そして、更に進んだ方式としては、お客が自動レジですべて自分で精算するタイプのセルフサービスも存在します。

#### 【家具チェーン店】

家具店のセルフサービスではスウェーデンのある家具会社 (IKEA) が特に有名です。ここでは家具がどこか別の場所より少し安価です。しかしながら、容易に運搬が可能なものはすべてお客が自分で自宅に持ち帰らなければなりません。そして購入した家具を自分で組み立ててからようやく、その家具を配置することができます。世界中で既に 5 千万個以上販売したあるタイプの本棚では組み立てにかかる時間は 15 分くらいですので、8 ユーロ 50 セントという最低賃金で計算すると、これは本棚 1 個当たり約 2 ユーロ ( $8.5 \times 1/4$ ) の人件費になると思われます。そしてその人件費はお客たちが負担していることになります。

#### 【旅行会社】

旅行会社は、多くの顧客が既にインターネット経由ですべて自分で行うことに慣れていしますので、廃業に追い込まれるところもあります。一方では、旅行会社の廃業により顧客は旅行会社で得られるかもしれない助言を得られないことが出てきます。殆どすべての情報は、インターネットで得られますが、とは言ってもすべての情報が得られるというわけに

はいきません。そして旅行会社の専門家はしばしば、顧客がインターネットで見つけるよりもより良質の情報を持っているといいます。

#### 【銀行】

今日では銀行では、以前であれば銀行員が顧客のために処理してきたことを顧客が多くのことを自分でやらなければなりません。これは自動預け払い機を使った預け入れや引き出しだけでなく、振り替え送金にも当てはまります。専門家が有価証券保管所の管理で助けなければならない人は、これに対し顧客がインターネットで調べてコンピューターを使ってすべて自分で行う（以前は常に銀行だけが行ってきました）時よりも多くの支払いをしなければならないといいます。

#### 【ガソリンスタンド】

ガソリンを自分で給油することは危険だという理由ではもはや禁止されなくなっただけからは、ガソリンスタンドの従業員はますます少なくなっていました。なぜならばセルフサービスの方が少し安くガソリンの給油ができたからです。ところが、ベルリンでは 6 カ所のガソリンスタンドを運営しているある男性は、その内の 3 カ所では今また月曜日から金曜日までの午前 10 時から午後 6 時半まで従業員を配置しています。そこではお客は、ガソリンスタンドの従業員がガソリンを給油するだけでなく、お客の車の窓ガラスをきれいにしたり、エンジンオイルの量をチェックしたり、冬用や夏用の曇り止め液を補充したり、タイヤの空気圧を検査したり、はたまた壊れた電球の交換さえも行うといいます。しかしながら、ガソリンの代金としてセルフサービスの場合より多く支払うことはありません。そのようなサービスは、お客にとって無償ですが、スタンド経営者には行う価値があるということです。というのは、多くのお客は、それらの無償のサービスに対して感謝してくれているし、再三再四来てくれるようになり、固定客になってくれるからです。そうするとしばしば洗車のためにガソリンスタンドに車を持って来てくれますし、ガソリンスタンドに併設の小さな店で、例えばビールを買ってくれたりもするからです。

#### 【航空会社】

大抵の空港では搭乗客が搭乗券をもらえるカウンターが依然としてあります。しかしながら、この場合航空会社によってはお客は少し割り増し料金を支払わなければならないようです。そのため、また多くのカウンターでの長蛇の列を嫌うため、旅行客は自動チェックイン機を使ってセルフサービスで発券してもらったり、多くのことをインターネット経由で自分のケータイ電話の助けを借りて処理することがますます多くなってきているといいます。

このようにさまざまな場所で機械を使ったセルフサービスが拡大されることにより、一方

ではますます多くの職場がなくなってきており、失業率が上昇する原因ともなっています・・・。

ところで、セルフサービスによる給油について私が調べたところでは、ドイツで初めてガソリンスタンドでセルフサービス方式が導入されたのは1972年ということです。当時は綺麗に着飾った人々が自分の高価な車に給油する時、給油ノズルに触れることにより手を汚すのではないかという懸念があったという記事がありました。私自身は1986年～91年のドイツ勤務時代に初めてセルフサービスの給油を経験しましたが、「手が汚れる」懸念より、事故が起きないかという不安があったことを思い出します（日本ではドイツより26年後の1998年、規制緩和策により導入されましたのでそれ迄セルフサービスの給油の経験はありませんでした）。私はその後日本では車の運転はしておりませんので、日本でのガソリンスタンドにおけるセルフサービス方式の給油がどの程度広まっているか分かりませんが、近所のガソリンスタンドでは引き続き店の従業員が給油している一方で、セルフ方式も導入しているようです。

さて、私の住んでいる東京都北区の某地域では競合する大きなスーパーマーケットが3店舗、中規模の食品スーパーマーケットが2店舗あります。この内1店舗では、通常のレジの他に放送で紹介された real と同様の音声ガイダンスがある完全セルフサービスのレジもあります。お年寄りも余り利用していないような印象を受けます。また、時折利用するドラッグストアにおいても一部薬品は対面販売ですが、その他の薬品、すべての雑貨、健康食品などはセルフサービスで買い物籠に入れ、レジで支払います。さらに日本では大規模な病院では再診受付も診察カードと機械で行うところが増えているようです。

Selbstbedienung という語句はどこかで聞いたことがあると思っていましたが、この „Direkt aus Europa“ でした。この音声資料のダウンロードやテキストの印刷・冊子化も一般のセルフサービスとは趣は異なりますが、セルフサービスの一種には違いないことを思い出しました。

今回紹介されている IKEA については、私もドイツ勤務時代は利用していましたが、あるタイプの本棚の販売数が5千万個と知って驚いています。IKEA については、たまたま一昨日のテレビ番組で特集して放送されていましたが、その中で印象的だったのは、同社初の日本人デザイナー（在籍は1973年～1978年）がデザインした肘掛け椅子が発売年の1976年から累計で3千万脚が販売された旨紹介されていたことです。上記の本棚同様、この肘掛け椅子も同社のヒット商品ですが、その数量のスケールの大きさに驚きました。また、IKEA にかつて日本人デザイナーが勤務し、その彼がかつてヒット商品を生み出したことも印象に残りました。

ところで、今回動詞 tun の使い方が面白いと感じました。これは日本のドイツ語学習者（自分自身も含めて）が余り知らないのではないかと思いました。実は私自身も2年前、「ドイツ語作文 400 題」で以下のような問題文とその解答文によりこの tun の意外な使い方を初めて知った次第です。

「シュークリームの中に何を入れますか。」「ホイップクリームです。」  
„Was tun Sie in die Windbeutel?“ „Schlagsahne.“

今回課題中においても、etwas auf den Teller tun 「あるもの（料理）を皿に載せる」、etwas in eine Tüte tun 「あるものを（買いたい野菜や果物）を袋に入れる」という箇所でも tun が使われています。手元の辞書で調べると、以下のような類似表現が見つかりました。この tun は色々な場面で使える表現だと思いました。

Salz in/an die Suppe tun 塩をスープに入れる

das Gepäck in den Kofferraum tun 荷物を車のトランクに入れる

Wasser an die Bäume tun 樹木に水をやる

さらに Duden Deutsches Universalwörterbuch には以下の表現例も掲載されています。

Das Geld tue ich auf die Bank. お金を銀行に預ける

Den Kleinen tun wir zur Oma. ちびちゃんをおばあちゃんに預けよう

最後にセルフサービスに話を戻しますと、これは私達に便益を提供してくれる一方で、私達の職場を奪っている側面もあることを改めて認識しました。そして今後ますますこの傾向は強くなるのではないかという不安も残ります。

K. K.

2017年6月19日

## 2017年6月 Nr. 435

さて、今回は、ガリ氏(Herr Galli)という43歳の現職の刑務所長(Gefängnisdirektor)が受けたインタビューが話題になっています。

ガリ氏は2016年4月に刑務所長としての自らの経験について書いた本(価格は12.99ユーロ)を出版しましたが、その後ヴァイス氏(Herr Weiß)による取材を受けました。そしてその時の両氏の対談が同年7月に南西ドイツ放送(Südwest-Rundfunk、略してSWR)で放送されました。

刑の執行業務における15年以上もの勤務期間を経た経験から、ガリ氏は刑務所が余り意味があるとは思っていないといいます。なぜならば、刑務所では精神的なプレッシャーや少々攻撃的な雰囲気が支配しているからだといいます。受刑者たちは隔離されているので、刑務当局が余り影響力を行使できない自分達固有の社会、言い換えれば、一般社会とは遊離した「並列社会」(Parallelgesellschaft)を形成しているということです。そこでは罪を犯した者は、他の者から学び、刑の執行という目的とは相容れない、ある種の統合が起きるといいます。そして、一般社会とは別の価値体系や規範を有する社会が生じるといいます。

刑期を終えて刑務所から出所した者は、その後、入所前に比べると、得られるチャンスはより少なくなり、社会の縁にさらに追いやられてしまい、結果として社会にとってより危険人物になっているとのこと。ガリ氏は、刑務所は、本来果たすべき任務、すなわち、刑務所は、受刑者たちが刑務所からの出所後に社会の認められた一員として生活し、再び罪を犯すことがないように尽力することを、果たしていないと考えています。

犯罪を減らし、犯罪行為を少なくなることを達成しようとする場合、その人達を遠ざけて刑務所に隔離することは全く非建設的であると言います。しかしながら、刑罰を廃止すること、この点についてはガリ氏は、無意味だと考えています。刑罰は見せしめのためには必要であるが、刑罰を恐れさせるためだけであってはならないといいます。ガリ氏は、犯罪者(特に1,2年の短期受刑者)に対しては刑務所に入れる代わりに公益的な仕事を命ずる判決を下す方がいいと思っています。

更に正に他のヨーロッパ諸国におけると同様、ドイツでも居場所を監視できるように足枷

や電子的手段をもっと多く投入すべきであるとのことです。刑務所よりいいのは、電子的に監視された自宅軟禁であるといえます。ガリ氏はそのような方法を用いることにより、現在禁固刑・懲役刑をもって達成しようとするをずっと低コストでかつ人間にふさわしいやり方で達成できるであろうし、また、より少ない損害で済むだろうと考えています。

受刑者の中には当然、非常に危険な人物もいますし、そのような人物が生存中はずっと彼らから社会を守らなければなりません。ガリ氏は、そのような人物もまた人間にふさわしいやり方で扱わなければならないと考えています。ガリ氏はその模範事例がオランダにあると見ています。オランダでは村に似た刑務所がそのような受刑者たちを抱えています。その刑務所内では彼らは自由に行動することができる、といえます。

ガリ氏は大学で法律を学びましたが、学生の時には刑務所がどのようなものか見学しようとは思いませんでしたので、刑務所に法律家も勤務していることさえ知りませんでした。しかしながら、ある刑務所で一つ勤め口がその時ちょうど空いていました。そこでその職をすすめられ、ガリ氏はそこで働くことに決めました。これは全くの偶然でした。その後ガリ氏は長い間、バイエルン州のいくつかの刑務所でも勤務後、ザクセン州でも勤務しました。

ガリ氏は今後も刑務所での勤務を続けるかどうか、ガリ氏自身にも分からないということです。刑務所での仕事の目的は、受刑者たちを社会復帰させることであるべきですが、実際にはそうっていない様に見える、といえます。出所させられた受刑者たちが、その後どうなったのか、当局により全く調査・検証されていない、といえます。そして刑務所長として成果を上げたと思なされるのは、その任期中にもめ事がなく平穩に事態が推移する場合とのことです・・・。

ところで、ガリ氏のように現職の刑務所長が本を書いたり、今回のようにインタビューに応じたりするというのは、日本では余り考えられないと思いますので、驚きました。数年前の放送・課題で、やはり現職の裁判官がインタビューに応じていたことがあり、この際も日本では考えられないという印象を持ちましたが、今回も同様の印象を持ちました。更に今回は、特に「刑務所は余り意味があるとは思っていない」とのガリ氏の発言は、現職の刑務所長としては非常に衝撃的な発言であると思います。いわゆる「言論の自由」は当然認められるべきですが、現職の刑務所長の発言としては穏やかでないというのが私の率直な印象です。しかしながら一方では、周囲の怒りや反発も承知の上でそのような考えを書いた本を出版する彼の意志の強さには感服します。放送によると昨年の本の出版時には人々の関心を集めたようですが、彼の考えに対して一般のドイツ人は具体的にどのような反応、例えば賛成や反対などを示したのでしょうか。また、この本はどれ位売れたのでし

ようか。彼の組織の中でのその後の立場は大丈夫なのかと思いました（私が調べた限りにおいては、ガリ氏は2016年9月まではZeithainの刑務所長を務めていましたが、10月以降は共同で設立した法律事務所で弁護士として活動しているようです）。

ところで、今回も私には気になるドイツ語表現がありました。課題の最終パラグラフで *Was aus den Leuten wurde,~, werde von den Behörden gar nicht überprüft.* と（いう風に）聞こえる文が出てきますが、この中で „Was+aus 人+wird“（「ある人がどうなるか」）はドイツ語学習者にとってはチェックしておくべき表現だと思います。以前どこかでこの表現を見たとき、簡単な語句で構成されているにもかかわらず、ちょっと理解しにくい表現だと思ったのを思い出しました。手元の独和辞典では、次のような類似の例文が掲載されていました。 *Was aus ihnen geworden ist, wissen nur wenige.*（「彼らがどうなったか、知っている者はごくわずかしかない」） *Was soll aus uns werden?*（「一体我々はどうなるのだろう」）ここで使われている *aus* は、「材料・構成要素」（「～できている」「～から」）を表していますので、ここでは「人間を材料にしてあるものできている」→「人間があるものになる」ということになりますので、大変おもしろい表現だと思いました。この *aus* を *was* なしで用いた例として（*was* の代わりに *ein guter Lehrer* が使われています） *Aus ihm ist ein guter Lehrer geworden.*（「彼は立派な先生になった」）という例文が辞書の *aus* の項に掲載されていましたが、逆にこの内容の日本語をドイツ語に作文すると、普通私たち学習者は *Er ist ein guter Lehrer geworden.* とすると思います。この二つの文にはどのようなニュアンスの違いがあるのでしょうか。興味は尽きません。

ところで、6月16日、コール元首相が87歳で死去したというニュースが国内外の多くのメディアで流れました。ドイツ再統一とEU統合の礎の構築で貢献しましたが、その後不正献金疑惑で政界を引退せざるを得なくなったことが思い起こされます。一方では、メルケル氏の抜擢という先見の明が彼にあったことが、メルケル首相という現在のドイツの政治にもつながっています。一昨年のヴァイツゼッカー元大統領とシュミット元首相、今年のゲンシャー元外相、そして今回のコール元首相の訃報はドイツに関心を寄せてきた私にとっては一時代の終焉を思わせ、感慨深いものがあります。

K. K.